

事項	ばれいしょのジャガイモシストセンチュウ防除対策には抵抗性品種「キタアカリ」の作付が有効である		
ねらい	ばれいしょ栽培に重大な影響を及ぼすジャガイモシストセンチュウの発生が平成15年に本県で初確認され、平成17年までに7市町村86地点に及んでいる。本種はシストの含まれる土壌を介して、容易に未発生地に伝搬するため、まん延防止対策を基本とした防除法の確立が急務であった。そこで、抵抗性品種の線虫密度低減効果と被害防止技術を検討したところ、抵抗性品種「キタアカリ」の利用が本線虫防除に有効であることが確認されたので参考に供する。		
指導 参考 内容	<p>1 抵抗性品種「キタアカリ」の線虫密度低減効果</p> <p>(1) キタアカリを作付けすると、圃場の線虫密度は植付前の2割程度となり、大幅に低下する。</p> <p>(2) キタアカリの線虫密度低減効果は、植付前線虫密度の高低によらず一定である。</p> <p>(3) 高密度圃場(健全卵数/乾土1g\geq100個)でキタアカリを2～3年連作すると、線虫密度が低密度(健全卵数/乾土1g$<$10個)まで低下する。</p> <p>2 抵抗性品種「キタアカリ」の耐虫性と被害回避</p> <p>(1) 線虫発生圃場では線虫が根を加害することにより地上部の生育が遅延し、いも数及びいも重が減少するが、その程度は植付前線虫密度と品種の耐虫性によって決まる。</p> <p>(2) 低～中密度圃場では、キタアカリは感受性品種の男爵薯より耐虫性が強く、薬剤防除を行わなくてもほとんど減収しない。</p> <p>(3) 高密度圃場ではキタアカリでも大幅に減収し、被害を回避するために薬剤防除が必要となる。なお、効果の確認されている薬剤はネマトリンエース粒剤20kg/10a及びバイデートL粒剤30kg/10aの植付前全面土壌混和である。</p>		
期待される効果	ジャガイモシストセンチュウ発生圃場の線虫密度が低下し、まん延防止に効果があるとともに、ばれいしょの安定生産に寄与する。		
利用上の注意事項	<p>1 本資料は平成19年3月1日現在の登録内容に基づいて作成した。</p> <p>2 農薬を使用する場合は、必ず最新の「農薬登録情報」(http://www.maff.go.jp/nouyaku/)を確認すること。</p> <p>3 ジャガイモシストセンチュウ発生圃場で作業する場合は、シストの含まれる土壌が未発生地に拡散しないように、耕作機械等の洗浄や収穫物に付着した土壌の管理を徹底して行う。</p> <p>4 種いもは植物検疫所の検査に合格したものを使用する。</p> <p>5 感受性品種の野良生えがあると抵抗性品種の線虫密度低減効果が低下することがあるので、野良生えにシストが着生する5月末までに抜き取る。</p>		
担当部署 (担当者名)	青森県農林総合研究センター 病害虫防除室 (木村勇司)	対象地域	県下全域
発表文献等	平成16～18年度青森県農林総合研究センター試験成績概要集		

【根拠となった主要な試験結果】

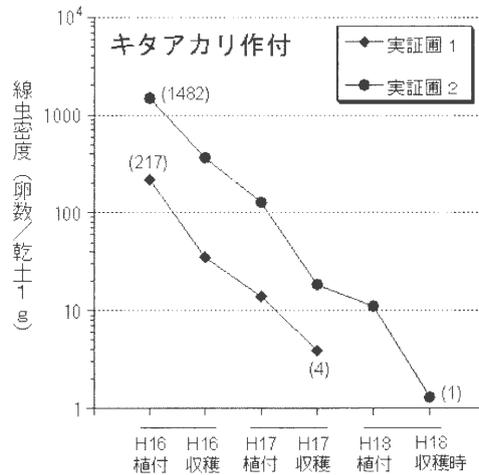
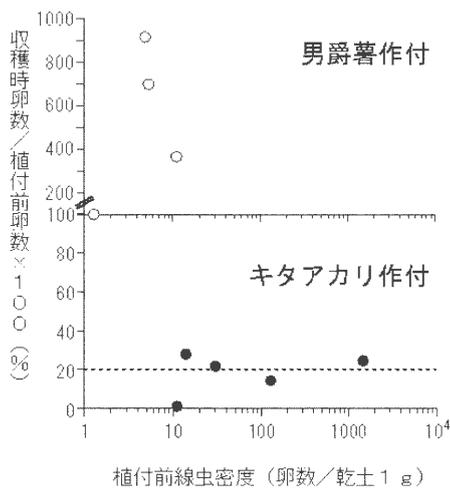


図1 キタアカリ及び男爵薯作付後の線虫密度の増減
(平成16～18年青森農林総研)

図2 キタアカリ連作圃場での線虫密度の推移
(平成16～18年青森農林総研)

(注) 図の縦軸は常用対数目盛

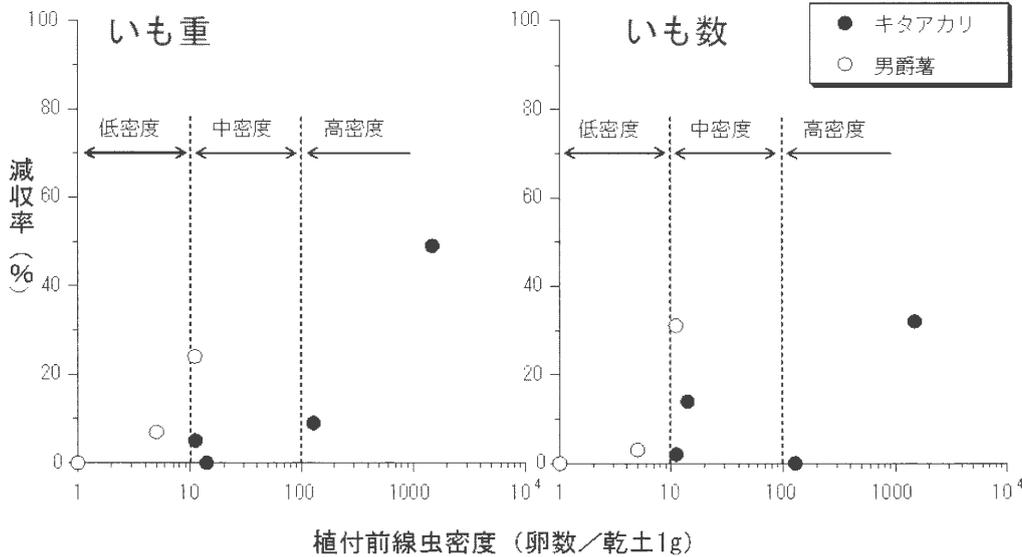


図3 無防除でキタアカリ及び男爵薯を作付した場合の植付前線虫密度と減収率の関係 (平成16～18年青森農林総研)

(注) 減収率 = 100 - [無防除区の全いも重 (または全いも数) ÷ 薬剤防除区の全いも重 (または全いも数) × 100]、ただし値が0以下になる場合は減収率0とした。なお、薬剤防除区はネマトリンエース粒剤20kg/10aまたはバイデートL粒剤30kg/10aの植付前全面土壌混和を行い、減収しないと仮定した。